

死刑台のエレベーター

観賞日 2018・7・23

制作 1957年 仏

上映時間 91分

監督 ルイ・マル

撮影 アンリ・ドカエ

音楽 マイルス・デイヴィス

出演 モーリス・ロネ (ジュリアン・タベルニエ)

ジャンヌ・モロー (フロランス・カララ)

【あらすじ】

1950年代後半のパリ。武器商の社長夫人フロランスと元将校で社員のジュリアンは不倫関係にある。二人は邪魔になった社長の殺害を共謀、ジュリアンは首尾よく計画を実行するが、思わぬアクシデントに見舞われる。エレベーターに閉じ込められたうえに愛車を盗まれ、さらに車を盗んだ犯人が起こした殺人の罪まで着せられそうになる。

約束の時間になっても現れないジュリアンを探して夜のしじまを彷徨うフロランス。

当時の病んだフランス社会を背景に、鬼ルイ・マルの斬新な演出が光る傑作。

【解説】

■ポイント

・監督ルイ・マル 25歳のデビュー作にして、ヌーヴェル・ヴァーグの話題作

1950年代後半～60年代のフランス映画を席卷した新しい波

主要作家：アレン・レネ、ジャン・リュック・ゴダール

フランソワ・トリュフォー他

日本映画界にも影響を与える（松竹ヌーヴェル・ヴァーグ）

■見どころ

・オープニング・シーンとエンディング・シーン

オープニング：ジャンヌ・モローの顔の超アップから始まる二人の電話シーン。

追いかけるトランペットの響き。インパクト充分の導入部。

エンディング：トランペットの音色とともに現像液から浮かび上がる証拠写真

・マイルス・デイヴィスのトランペット演奏

乾いたトランペットの音色がモノクロ映像と絶妙にシンクロする

特に夜の街を彷徨うモローの気持ちに寄り添う

・モーリス・ロネの演技とアンリ・ドカエの撮影

（二人とも前回上映「太陽がいっぱい」にも登場）

モーリス・ロネ：「太陽がいっぱい」ではドロンの輝きに食われていたが、本作では魅力を発揮

アンリ・ドカエ：前はイタリアの明るさを撮り、本作ではフランスの奥深さを撮る